

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 54 2019年4月

政府機関関連への協力	エジプト投資省 投資促進アドバイザーを終えて	2
自治体・中小企業支援	「和の心」を「海外へ」	3
教育	新しい時代に向き合う中京大学「社会人基礎力講座」について	4
	東洋大学「Global Company Strategy」講座と企業訪問	5
	国際理解学習の講師体験	6
	小学校でのオリ・パラ教育「スイスってどんな国？」	7
	小学校でオリ・パラ教育の授業	7
留学生支援	日本語広場中級クラスレッスンin兵庫国際交流会館	8
	一碗のお茶から世界につながる	9
事務局だより	ABIC設立20周年に向けて	10
	ABIC関西地区会員懇親会を開催	10
	平成30年度 JASSO功労者として表彰	11
	会員の種類	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数	12
	賛助会員入会のお願い	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

www.abic.or.jp

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

エジプト投資省 投資促進アドバイザーを終えて

おがわ はるひさ
小川 晴久 (元丸紅)

2017年9月から2018年10月までの13カ月間、JICA専門家としてエジプトに派遣された。このプロジェクトは2013年と2016年の2度にわたるエルシーシエジプト大統領の訪日を受けて、投資ビジネス環境の整備、投資誘致力の強化等を目的として、エジプト投資・フリーゾーン庁(GAFI)より長期派遣専門家の派遣を要請されたことによるものである。

私は1977年に丸紅に入社してプラント本部繊維機械部に配属され、当時綿紡績が基幹産業であったエジプトへの紡績プラントの輸出が主な担当業務であったことから、1986年、1995年と2度にわたって11年間エジプトのカイロに駐在した。2001年に丸紅を早期退職後、ABICを通じJICA専門家として2年間GAFIジャパンデスク長として勤務、その後三井住友銀行カイロ事務所長として9年間駐在したので、今回の勤務を入れてエジプトには通算23年間駐在した計算になる。今回のGAFIジャパンデスク勤務は、2001年から2003年までの経験を基にABICの仲介サポートを得て実現したものである。

17年のギャップのある2度のGAFI勤務で感じたのは2点で、一つはGAFIのスタッフのレベルが格段に向上していること(PhDのスタッフが多数いる)と、GAFIを訪問する日系企業の数が増えたことである。後者については日系企業の欧州進出がかなり増加したこと、湾岸特にドバイに中近東とアフリカをコントロールする日系の支社や出張所が設立されるようになったために、頻りにヨーロッパ諸国やドバイからエジプトに出張者が来るようになり、その際にGAFIのジャパンデスクを訪問するというパターンが定着してきたものと推測される。また最近では製造業を中心に、エジプトを軸にアフリカマーケットへの展開を図るとか、ヨーロッパの生産拠点をエジプトなど北アフ



ロンドンでの個別企業面談風景(右手前が筆者、右中央はGAFI次官モハメド・アブデル・ワハブ氏)

リカに移したり増設したりという計画をもってGAFIを訪問される企業が増えているのを痛感する。EUとの連合協定や東南部アフリカ市場共同体(COMESA)などの自由貿易協定のメリットもそんな動きの背景にあると考える。

今回の業務は13カ月という限られた任期だったが、2017年12月のサハル・ナスル投資・国際協力大臣の訪日、2018年9月のロンドン、デュッセルドルフでの在欧日系企業対象のエジプト投資促進セミナー(JETROとの共催)のメインイベントを軸として、新投資法の紹介や在エジプト日系企業のサポート等種々のアプローチで日本からの投資促進業務ができたと考えている。

エジプトは日本の3倍弱の広い国土を有し、すでに非公式には1億人に達して数年内に日本を抜くといわれる人口とマーケット規模があるのに、GDPは日本の20分の1という現実を見ると、今後まだまだ伸びるポテンシャルのある国の一つである。

先見の明のあるエルシーシ大統領は日本の教育制度をエジプトに導入したいとの期待から、大使館・JICAに協力を要請してきた。現在小中高から大学、大学院までJICAが日本式教育をエジプトに普及させる取り組みを実施しているが、これは今後の日本企業のエジプト進出を助ける意味からも大変有意義な協力と考えられ、エジプトが日本式の教育制度でどのように変わっていくかを見るのは非常に楽しみである。

最後に、エジプトはスポーツ天国である。ゴルフ、テニスはもちろん、乗馬、スキューバダイビング、ウィンドサーフィンは週末に、しかもかなり低料金で楽しむことができるので、スポーツ好きにはうれしい国である。私が23年間もエジプトにいられたのは多分そのせいだろう。



ギザのピラミッドとスフィンクス

「和の心」を「海外へ」

すぎやま ひろし
杉山 博 (元 富士フィルムビジネスエキスパート)

2017年6月にABICから宮崎県のガラス工芸作家・黒木国昭先生が海外展開の手伝いを探しているとの募集を目にし、東京都中小企業振興公社に勤務していた折に、江戸切子を製造販売する会社を2社ほど支援していた経験から早速応募した。

面接でお会いした黒木先生のガラス工芸品に込める「熱い思い」をお聞きし、何とかお役に立つことができたらと以下に述べるようないろいろな活動を行ってきた。

まず考えたことは、①関東エリアでの拡販をメインとするが、商品の特徴（「和」の精神を表現）から、先生の作品は海外の方がマーケットがより広いのではないかと、②そのためには海外の展示会への出展の機会を提供する、③国内外の百貨店での「個展」による販売メインの柱に加えて、空間装飾市場（建築物の一部としてガラスを使用）を拡大することであった。

海外における販路開拓の基本に据えたのは、(1)マーケティング（市場価格、競合他社の販売価格など）を調査して自社のメイン商品をどこで売るかの戦略立案から始める、(2) 3年から5年の期間をかけて自社の販路を確立する長期的なビジョンの設定、(3) 時代の変化に敏感に対応した商品化。これを進めるために東京都中小企業振興公社の支援商品としての認可を受け、2019年は2月12日ー15日にビッグサイトで行われた「ギフト・ショー」に出展。また、夏以降に同公社の支援商品として海外展示会への出展という新しい市場デビューを計画している。今後の事業の大きな柱として期待される「コミッションデザイン」＝「空間装飾事業」に関してジャパンデントコーポレーション（漆、紙、箔、金属など伝統工芸品を「日本の『つくりて』の想いを世界の『もともとて』に繋ぐ」をキーコンセプトとする専門商社。外務省のロンドン



「第87回東京国際ギフト・ショー」公社ブースにてガラスアート黒木中山課長補佐と筆者（左）

にある「ジャパンハウス」、JR東日本の「TRAIN SUITE 四季島」への納入実績あり）との協業である。

また、2019年は以下の三つの目標を立てた。

1. TTP11が施行されフォローウインドが吹くベトナムは私が駐在した関係から、乙仲を始め現地のネットワークがほぼ確立しており、ホーチミンで「個展」を開催すること。「ボストン・コンサルティング・グループ」によれば、ベトナムは2020年には中間層が2,250万人、富裕層は1,020万人、人口は9,610万人になると予測。この結果、中間層は人口の23%、富裕層は11%まで増加し、国民の3人に1人は中間・富裕層になるといわれる。ASEAN諸国の中でもポテンシャルの極めて高い市場。
2. ジャパンデントコーポレーションとの協業により海外の高級和食レストランや5-Star Hotelに「空間装飾事業」の実績を上げること。国内は、富裕層の別荘や自宅にステンドグラスのように室内装飾用途としての実績を上げる。
3. ジェトロ新興国進出支援でお手伝いをした中央ビルサービスの奥田社長（東京立川こぶしロータリークラブ^(注)の役員）から、東京立川こぶしロータリークラブの例会でメンバー（94人）に対して黒木先生から「卓話」を通じて「硝子作家の『想い』、『作品を通じて伝えたいこと』」などについて講演願うご提案をいただいた。これを機会に各地域でリーダーシップを取っている多くのロータリアンに「ガラス作家」の素晴らしさを知っていただきたいと思っている。

(注) 東京立川こぶしロータリークラブ（国際ロータリー第2750地区）は東京西南部とマイクロネシア地区の99クラブで構成され、地区会員数4,800人を超える組織。



ジャパンデントコーポレーションにて堀井社長（右）と中山課長補佐

教育

新しい時代に向き合う中京大学 「社会人基礎力講座」について

えんどう きょういち
遠藤 恭一 (元 三井物産)

ABICの大学での授業支援に関わってもう8年になる。最初は青山学院大学、次は名古屋の中京大学で講義をさせていただいている。特に中京大学ではほぼ毎年「社会人基礎力講座」の講義を実施している。この講座はABIC会員でもある同大学宮川正裕教授の紹介で実現したものである。

われわれ世代はわが国の健全な成長を目標に、日常生活を安全、清潔、快適に過ごせる環境づくりに懸命に取り組んできたと考えている。しかし、そうした環境になじんだ現代の若者はかえって融通無碍あるいは臨機応変に対応し得る人材に育っていないのではないかと思われる場面が散見される。この環境下、学生時代にどう社会性を身に付けたら良いのかが「社会人基礎力」（前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く）講座の背景にある。

振り返ってみれば、われわれの子供の時はお遣いに行けば、必ず他人との会話を通じて買い物をした。しかし、今はスーパーマーケットやコンビニで店員と会話するようなことはない。他人と話をすることで身に付く社会性を育む機会すら少ない。また、学校と社会が充分連携していないように思える。一般社会適応への十分な訓練機会が高校までの学校生活にはないといえる。大学生になればアルバイト等で社会の実態に触れて一般社会の矛盾や理不尽さが理解できる。また、今の教育では知識の習得状況を把握するために「正解」を求められる。その習い性が世の中には必ずどこかに「正解」が存在すると考え、早くその答えにたどり着くことだけを考えている。世の中に「正解」はないといった考え方そのものを教えることがない点も気になるところである。激しく変化する社会の中で明確に「未来は

予想できない」と教え、単に知識を授けることではなく、自らのやりたいことを実現するには何が必要かを一緒に考える講義が求められるのではないだろうか。

ではそのためにはどのように教育を変革すれば良い

のであろうか？ 数年前まで私は授業を通じて、自らが経験してきたことを伝える点に重点を置いてきた。しかし、世の中の変化の激しさを鑑み、経験を伝えることから、その経験をした結果として「特に失敗した経験から何を学んだか、あるいは何を感じたか、今後どのような点に注意すべきかの気付き」を語る方式に変えている。いわば、ピンチをいかにチャンスに変えるかを話すことにしている。

学生には日常的な限られた生活範囲から飛び出ること。まだ見ぬ、経験したことのない一人旅等の経験を通じて、他人との積極的な交流をすること。現代社会の構造を理解するための広い視野を持つこと。そこから自らが何を基準にして判断するか、あるいは「自分にとって重要な価値基準は何か」といった問いに答えられると考えている。実際の授業で自ら情報を収集して評価し判断できる「生きるすべ」の確立。自分の立ち位置が分かるための近現代史への

深い理解。価値観の違う人々とのコミュニケーション能力も磨かなければならない。何にもまして安全で、清潔で快適な世界から抜け出し自分の頬に「生の風」を受けることが重要ではないだろうか。必要なことは、新たなものごとに挑戦することであり、成功の反対は挑戦しないことだと教えることではなかろうか。「リスクを取らないことに対するリスクを知ることおよびピンチをチャンスに変えること」を学生に伝える講義を心掛けている。



あいさつをする筆者

目次

- 社会人基礎力とは
- なぜこうした能力が求められるのか
- その問題背景を探り、時代の流れを考える
- 企業の採用で重視する内容は、新しい社会が求める人材
- 前に踏み出す力
- 考え抜く力とは
- 世の中に正解はない
- 働きかける力と実行力
- 社会のマナーを適切に身に付けるとともに
- 人生の設計図は自分で



講義資料より

教育

東洋大学「Global Company Strategy」講座と企業訪問

つるみ くに お
鶴見 邦夫 (元 住友商事)

2017年度に新設された東洋大学国際学部グローバルイノベーション学科のABIC講座「Global Company Strategy」の開講以来、講師を担当している。講座は受講生が留学生主体の英語での講義で、ABIC会員の4人の講師が「総合商社」「インターネット」「自動車産業」「企業経営・異文化交流」を担当するオムニバス形式となっている。

住友商事出身の筆者は「商社」の講義を担当。講義は総合商社の変遷、機能と役割など全般的な内容が主体となっている。2年目の2018年度の講義では、同講座担当教授の佐藤節也先生より、受講生である留学生に実際に日本企業（総合商社）を訪問する機会を作ってほしいとの要請があった。住友商事関係者に相談し、同本社訪問の了解を取得した。2019年1月18日に9人の留学生を引率し、佐藤先生と共に9月に移転したばかりの大手町プレイス・イーストタワーにある住友商事本社を訪問した。

中には同じ敷地内にある別のタワーロビーに行った学生もいたが、無事に集合時間には間に合った。訪問受け入れには須之部住友商事常務執行役員／住友商事グローバルリサーチ社長の全面的なご協力をいただいた。同社長より「The Ever-Evolving Business Model of the Sogo Shosha」というテーマで400年前の住友の源流から、時代の変化に合わせ変革しながら成長してきた住友商事の歴史とビジネスモデルの変遷について説明いただき、受講生からの活発な質問にも丁寧に対応いただいた。

訪問の最後に、住友商事本社内のオフィススペースを見学した。当日は快晴だったこともあり、高層オフィスビルからは眼下に日本銀行、視線を上げると東京スカイツリー、遠く筑波山まで見ることができた。短時間の訪問であったが、受講生には日本の大企業のオフィス環境や雰囲気を実感してもらえたのではと思う。講義と今回の企業訪問を通じ、留学生にとって日本企業（総合商社）の理解が少しでも深まれば、幸いである。

最後に、今回訪問した留学生の一人のClark Alda君（フィリピン出身）から、講義と企業訪問についての感想文が寄せられたので、以下に紹介させていただくこととする。

(以下、原文のまま)

Last January 18th, students from Toyo University attended a special lecture from Sumitomo Corporation Global Research Co. (SCGR) held in their headquarters in Otemachi. The students, who were taking the Special Lectures in International Business class

instructed by Professor Setsuya Sato, mostly came from South East Asian Countries (i.e. Indonesia, Vietnam, Philippines) and China.

The students learned about Sogo Shosha as a business model in their class. This time, through the history of Sumitomo Corporation (SC), the students learned about the evolving business model of the Sogo Shosha, as discussed by the President and CEO of SCGR, Mr. Kiyoshi Sunobe himself.

In learning about a unique and business model in Japan in a very limited time, the students first had to learn about the history and origins of the Sogo Shosha, and specifically about the foundation and the core business philosophy of SC. Then, through important past world events and crises, the students learned about how SC, and Sogo Shosha companies had to innovate and evolve their business models so as to survive and still be competitive in the market. Lastly, the students learned about the current business model of SC, and how the company innovates to create meaningful contributions in the global community.

Upon receiving fact and information kits about SC and SCGR, the students' curiosity were further answered by Mr. Sunobe, specifically about the company's global environment both in the workplace and in strategic planning, and in the company's future plans. One particular characteristic of the company that stood out was on how the company provides opportunities for their employees to grow and make a difference through giving them a chance to pitch in their ideas for a new business, even if it is distant from their current business model. This in a way enables the company to innovate faster, as ideas from employees, regardless of position and background, are given importance.

This lecture was an immersive discussion especially that the students came from different countries. As international students studying in Japan, opportunities to visit and learn from big companies are still a rare occurrence, and to learn about SC and the Sogo Shosha's evolution in the English medium proves how the company strives to innovate and be a leader in the international field.

After the lecture, the students enjoyed the majestic skyline view of Tokyo from the lecture room, and got the opportunity to see SC's working environment through a short office tour around the floor.

Clark Alda



高層階からの眺めを背景に集合写真
(後列右から3人目が筆者)

国際理解学習の講師体験

国際協力専門家 **則包** のりかね **佳啓** よしひろ

2018年秋口、ABIC関西デスクより滋賀県大津市立粟津中学校での国際理解学習プログラムの案内を受け、講師を引き受けることになった。

本プログラムはもとより、中学校庭に足を踏み入れるのも自身が中学生以来、初体験であった。緊張した。担当した国はフランス。特に専門家ではないが、妻がその国出身であり、何度か滞在した。語れることは一個人の取るに足らぬ生活経験からのものでしかなかったが、元来子ども好きである私は、この年になり青少年たちと多少交流する機会があり、次世代への思いに押された。

2018年12月3日当日は、いくつかの班（3-5人）でテーマ別に自主研究を行った3年3組の教室にお邪魔した。制服に身を包んだ生徒たちは男女がペアになり行儀よく座っており、私のあいさつにも応えてくれた。担任の先生は、生徒たちとほほ笑ましく溶け合っていた。

各班約10分弱の発表テーマは、フランスについての食、自然、観光地、芸術、日本との違い、スポーツ、有名人、お菓子、暮らしの多方面に及んだ。それぞれポスター1枚に手書きで生き生きと楽しくビジュアルにまとめられ、その内容にも、彼らの知的好奇心の深さ広さにも敬服した。

その後、講師の持ち時間となった。各班の健闘をたえ、参考資料としてフランスで使用されている実際の中学教科書（歴史・地理・公民）を生徒たちに回覧し、司馬遼太郎著『21世紀に生きる君たちへ』の本文コピーを各自に配布した。また、次のような項目について教室を回りながら生徒たちに語りかけた。一期一会に感謝、日本の国

際結婚、フランス語と英語、日仏国交160周年、日仏ニュースとステレオタイプ・偏見、『137億年の物語』（クリストファー・ロイド著）の紹介、^{しゃか}釈迦入滅から56億7000万年後の弥勒菩薩の下生、等々。

自身の国際経験を振り返り反省してみて、特に彼らに伝えなかったことは、自国の歴史文化をできるだけ理解・体得し、他国のそれと比較し、違いの中にも人間として共有・共感できる平等性や連帯感を見出してほしいことであった。そのためには、メディア情報を受容するだけでなく、自分自身で国際情勢を研究・分析したり実際に海外に旅行したり生活したりして、より多くの直接体験を積み重ね積極的に国際的に外向きな自己を育む努力が必要だということだ。

さて、彼らと接して何よりも印象的だったことは、一人一人個性に満ちており、その個性に新鮮な頼もしさを感じたことである。個性おのずから出る特性・異質性・多様性といったものが個人の生きがいや育み、自由・活力ある人間社会を整え、ひいては国と国、そして地球社会の平和へとつながってゆくものと願う。

その一つの鍵は、寛容性や慈悲心の学習・訓練であることは相違ない。人工知能（AI）が人類のそれを凌駕せんとする現代、これからの人間の使命は、知識・知能^{じょうが}よりも意思や精神面での友愛的進化を遂げることにあると思う。

このような観点から、ABICが協力するこのような国際理解学習への取り組みは、ますます推進されてゆくことを切に期待するものである。



授業風景

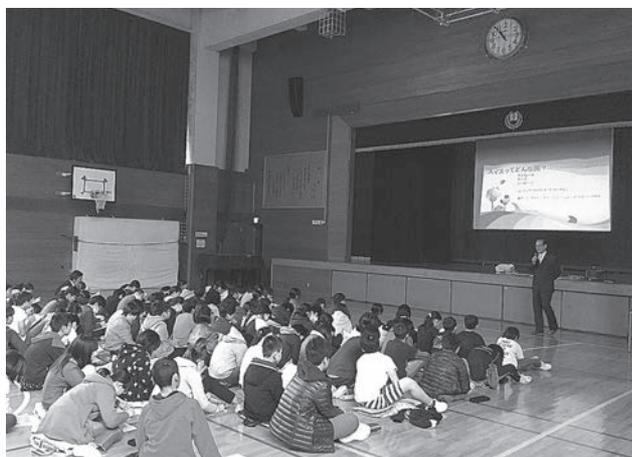
教育

小学校でのオリ・パラ教育「スイスってどんな国？」

おいし しげや
尾石 茂也 (元 トーメン)

今般ABICのお誘いを受け、墨田区立緑小学校6年生の生徒約90人の前で、スイスの文化・歴史について講演をさせてもらう光栄を得たことを非常に感謝している。と申し上げたが、内心小学校6年生の生徒にどのようなプレゼンを行えば良いのか？皆目見当がつかず、一時は内心お断りを入れようと思った。

永世武装中立、直接民主制、連邦制、国際機関等々学校で習うようなことを淡々と述べても、6年生はその内あく



びをし始め、興味を失うに決まっている。考えあぐねた結果、子どもたちの興味ある物から話し始めて引き付け、その後スイスの本質を説明しようかな？と思い立ったのだが、これも困難なことと判明した。

私がいつの間にか子どもの興味のあること自体が分からないおじいちゃんになっていたことを認識していなかったことである。これは痛烈なショックだった。

その痛々しい悩みを横目で見ていた女房が、さすが女性は素晴らしい、「あなた当然食べ物でしょ、チョコレート！」。これから私の頭が回り始めた。

プレゼンが何とか終わった時に、女子生徒3人が駆け寄ってきてくれて、質問があるとのこと。喜んで「何でしょうか？」と聞くと、「その眼鏡はいくら？時計は？そのスーツは？」女の子らしい質問に絶句した。

私のプレゼン内容には一切触れられずであったが、小学校6年生と楽しい話げできたことが素晴らしい成果であった。

その後1ヵ月ほどして、90人の生徒から「尾石様」と題した寄せ書きを一人一人より頂いたことは涙物で、生涯の記念となった。

小学校でオリ・パラ教育の授業

東京都では、オリンピック・パラリンピック開催に向け、小中高等学校で「ボランティアマインド」「障害者理解」「スポーツ志向」「日本人としての自覚と誇り」「豊かな国際感覚」を育む活動を推進している。その「豊かな国際感覚」育成の方法として、参加予定206カ国を、各小中高等学校に学習目標国として大国1カ国・小国4カ国ずつ割り当て、生徒たちがそれらの国について認識を深めるようにしている。現在小中高等学校へ行ってみると、廊下や階段の壁に、各校の学習対象となった5カ国について、地図や国旗などを紹介した模造紙が張ってあるのが見られる。

生徒たちがさらに詳しく学習を進めるため、学校側が外部講師を呼んで授業を行うこともあり、各国大使館、在日外国人・留学生、JICA、青年海外協力隊OB、NGOなどが講師を務めている。ABICも講師派遣可能な組織として、教育委員会に登録されており、学校側でなかなか適切な講師が見つからないような場合、声が掛かってくる。

こうしたきっかけで、この2年間でABIC会員は、アゼルバイジャン（目黒区・東根小学校）、リベリア（池袋第一小学校）、マダガスカル（練馬区・大泉第二小学校）、パラグアイ（国分寺市立第十小学校、杉並第七小学校）、インド（葛飾区・松上小学校）、エジプト（三鷹市立第四小学校）、オランダ（大田区・相生小学校）、スイス（墨田区・緑小学校）の授業を行った。

小学校での授業は、大学での講義や、社会人向け講演などとは違った難しさがあり、講師を務めることになった会員は、その準備に大いに頭を悩ませることになる。教壇に立って話を始めても、子どもの集中力は10分程度、いかに興味を持続させるか、話題や話し方に一段の工夫が必要になってくる。かくして、多くの会員にとっては、一生に一度といえるかもしれない小学生向け授業は、終わってみれば忘れ難い経験にもなっている。

(小中高校国際理解教育担当コーディネーター)

留学生支援

日本語広場中級クラスレッスン in兵庫国際交流会館

兵庫国際交流会館 日本語広場講師 みなとや 湊谷 あゆみ 亜由美

私は兵庫国際交流会館（HIH）で留学生を対象にABIC日本語広場中級クラスを5年近く担当している。前任の方とは日本ポーランド協会関西センターの会員同士でもあり、スムーズに引き継ぐことができた。また、ABICでは日本語教育以外に、関西圏の中・高等学校にて、国際理解教育の一環として私が留学していたポーランドについて紹介する機会もいただいた。

私はピアノ実技の講師として教育現場で仕事をしているが、外国人に日本語を教えるのは初めてで当初不安もあった。しかし、前任の方の授業を拝見し、独自のテーマや教材を使用し和やかにされているのを知り、自分も留学経験を生かし、学生の立場になって話題を考え、自然に日本語を習得できるように文化交流を通して、学生から自発的に発言できるレッスンを試みようとして毎回チャレンジを続けている。

中級クラスには主にアフリカやアジア諸国からの学生が在籍している。アフリカ諸国について、ほとんど知識がなく、アフリカの地図さえ正確に描くことができなかつたし、宗教についても、イスラム教の知識はゼロに近く、ABICの会員になったことで、自分の知らなかった世界に関心を持つようになった。中級クラスの留学生の多くは、来日するまでに日本語を勉強してきている。日本のマンガやアニメで「育った」世代で、同じ話題で盛り上がりと思いきや、私が子供の頃見ていたマンガやアニメとは時代が違い、かえって彼らからストーリーを教えてもらったり、その面白

さを熱弁してもらったりして、講師と生徒が逆転することもしばしばある。

留学生が日本の大学や専門学校に通って一様に感想を述べることもある。「日本の大学生はおしゃれで、学校に行くのにブランド物を着用している」「みんな勉強の目的がなさそうで、卒業したら何の仕事に就きたいかわからないし、授業よりもアルバイトの方が大事みたいだ」。日本人として「あちゃ〜…」と内心汗をかくことしきりである。彼らがこのような同世代日本人学生たちと将来世界のどこかで競争、あるいは協力して仕事をするかもしれないと思うと複雑で心配な気持ちである。

日本に留学した目的が明確で、現在もその道をひた走るある留学生がいる。2年半前にアフリカから来日し、ABIC日本語広場中級クラスに毎回出席し、メキメキ上達したY君である。彼との最初の出会いは、私の知人がある学校の始業式で、来日したばかりのアラビア語を話す子供のために通訳を探していたので、ABICを紹介させていただいたところ、ちょうどY君が引き受けてくれ無事解決した。この件の出どころの私にあいさつに来てくれたことが始まりであった。その後Y君は毎週受講してくれるようになり、日本語検定試験や留学生対象の各種イベントにも積極的にトライし、HIHでのウェルカムパーティーでは司会を務めるなど、留学生仲間ではちょっとした有名人になった。そして大変うれしいことに、私のピアノリサイタルや出演するコンサートに他の留学生友達と一緒に聴きに来てくれ、応援してくれた。きっと日本語を教えている時の私と、舞台の上での私のギャップが面白かっただろう。

彼はICTを専攻し、卒業後は日本のIT関係の会社に就職希望であった。そしてその通り、卒業と同時に自分で就職先を探し、情報セキュリティー会社のインターンとして採用され、2019年3月には正社員として契約するところまでこぎ着けた。そしてさらに将来は自分で起業したいという明確な夢がある。

社会人となった彼は、今でも時々忙しい合間を縫って、中級クラスに来てくれる。日本で就職を果たした彼の話は後進の留学生にとり興味深く、後輩たちに良い刺激になっている。「今度はIT専門用語や営業言葉、日本の会社で使う独特の言い回しが必要だね！」

多くの出会いを提供してくれるABIC日本語広場は、今後も楽しみである。



HIHウェルカムパーティー（右端が留学生Y君、左端が筆者）

一碗のお茶から世界につながる

東京国際交流館 茶道教室講師、裏千家茶道教授 ^{たなか かずこ} 田中 和子

ABICが主催する東京国際交流館での日本文化教室で茶道教室を担当させていただいて、あっという間に16年余りが経った。どのような経緯で関与し始めたのか、全く覚えていない（夫が政策研究大学院大学への中央アジアの留学生のお世話をしていたので、その関係で交流館とのご縁ができたのかもしれない）ので申し訳ないのだが、試行錯誤をしながらもほぼ設立当初からバザーへの協賛茶会、サマーフェスティバルでの体験教室も含め、貴重な体験をさせていただいている。ABICからは山田さん、千野さん、佐藤さん、田中さんら代々のコーディネーターにお世話になっており、当初は茶室のお掃除までさせていただいて恐縮した。

交流館には立派な茶室があり、最低限の道具はそろえてあったが、日本の文化の基礎にある季節感あふれるものがなかったのは残念であった。そうした中、最初の教室は2002年の7月、自宅からも道具を持ち込み七夕の趣向で始めたが、十余名の参加を得てお茶室は満杯になった。短冊に願いを書いてもらって笹竹に掛けた。

茶道は英語でtea ceremonyと訳されているが、いわゆるセレモニーではない。和敬清寂を根本精神とする「おもてなしの心」とそれへの「感謝の心」のコミュニケーションの場であり、お点前はそのための修練の手段である。点前を習得するには多少の時間がかかるし、修練には終わりが無い。全く無の空間である茶室で床の間に軸を掛け、分に応じた道具をそろえて客をもてなすのだが、本式の茶事では炉に炭を注いで湯を沸かし、懐石料理でお腹を整えてもらった後、濃茶と薄茶を味わってもらう。ここには数寄

屋建築、路地・庭園、懐石道具と料理、陶器・金属・竹や木製などさまざまな茶道具が関わる。茶道が日本文化を代表する総合芸術といわれるゆえんであり、限界はあるが交流館でもできるだけいろいろな道具を持ち寄り季節感や日本の伝統を味わってもらえるように努めている。

たとえばお正月にはお雑煮で新年を祝い、おひなさま、端午の節句、七夕などできるだけ日本の行事を取り入れ、季節感を楽しんでもらう。これまでの教室参加者は世界各国にまたがっており、海外旅行で買ってきた道具を使って茶道の国際性を共に楽しむこともある。英語での説明もするが、最近はやはり中国や韓国の留学生が多いので、毎回床の間に掛ける時季折々の中国の詩の一行や禅語の軸を、たどたどしい中国語で発音して文化の共有を試みる。始めの頃は日本で有名な陶淵明や杜甫、李白らの詩も知らない学生が多かったが、最近は中国でも唐詩なども教えるようになったのか、懸命に詩を吟じてみると唱和して発音を直してくれる人も増えた。中国で消えてしまった抹茶文化と、それに関わる茶陶や美術工芸品を日本が大切に守ってきたことを説明すると、大きくうなずいてくれる。

交流館の宿命であるが、留学生は短い期間に来ては去っていくので、こうした過程をゆっくり味わってもらえないのが残念であり、日本文化についてもどこまで知ってもらえたか不安であるが、それでも帰国してからメールを送ってくれたり、再来日の際に訪ねてくれたりするのには本当にうれしいことである。ABICの皆さまの国際貢献のご努力を多とするとともに、それに関らせていただいていることに心から感謝申し上げたい。



2019年初釜（前列左から2人目が筆者）



2018年サマーフェスティバル茶道体験教室

ABIC設立20周年に向けて

ABIC理事長、日本貿易会（JFTC）常務理事 **いわき ひろとし**
岩城 宏斗司

2000年4月に設立されたABICは2020年に20周年を迎えます。

設立初年度となる2000年に約900人であった活動会員数は、今や3,000人に迫る規模になりました。活動件数は、年間で延べ2,500件に上り、支援先も政府機関、地方自治体、中小企業、小中高校大学等教育機関、留学生など広範囲に及び、内容は実に多種多彩で、10年以上続いている案件も多数あります。日々新たな活動が創出されていることは、ABICの機能を求める社会からのニーズの高さを表しています。支援いただいた会員の皆さまのお志に深く敬意を表し、衷心より感謝申し上げます。

ABICが歩んできた19年間はグローバル化が着実に進展した時代であり、今もその勢いは衰えていません。さらに今注目目は、人生100年時代が本当に目の前に現れていること、そして2030年に向けたSDGsという世界共通の価値観と目標が明示されたことでしょう。ABICが活躍できるフィールドはますます広がると思います。20周年を迎える節目に、ABICの原点からの足跡を振り返り、今日の事業環

境の変化を捉え、高まる現場の要請や社会の期待に対して、引き続き質の高い貢献活動を展開していくとの決意を新たに、ABICの未来への道筋を見定めたいと思います。

引き続き皆さまのご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



関西地区会員懇親会にて会員と
(中央が岩城理事長)

事務局だより

ABIC関西地区会員懇親会を開催

2019年3月5日（火）18時より、ホテルグランヴィア大阪「孔雀の間」において関西地区会員懇親会を開催しました。関西地区を中心とする約50人の参加者を得て、岩城理事長による活動報告、中村会長のあいさつおよび乾杯発声の後、会員同士の活発な交流が行われ、にぎやかで楽しいひとときを過ごしました。



中村会長あいさつおよび乾杯発声



岩城理事長活動報告

事務局だより

平成30年度 JASSO功労者として表彰

12月8日(土)、東京都内で独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)が主催する「平成30年度JASSO功労者・優秀学生顕彰表彰式」で、ABICが「JASSO功労者」として表彰された。長年にわたる東京国際交流館および兵庫国際交流会館の居住者に対する日本語学習・日本文化教室や生活支援等による、留学生交流推進への貢献を高く評価されたもの。

この賞は従来「優秀学生顕彰」として学生を表彰対象としていたが、2018年度(平成30年度)より学生以外の個人や団体もJASSO功労者として表彰対象となり、第1号の受賞となった。

表彰式の後、功労者あいさつとしてABIC岩城理事長から以下のスピーチが行われた。

本年度から新設された「JASSO功労者」として、私どもABICを選出いただき大変光栄に思い、関係者一同を代表して心より御礼申し上げます。

ABICの東京国際交流館での支援活動は2001年に始まり、最初の定期的な活動は「日本語広場」という、留学生とその家族に日本語に親しんでもらうコミュニケーションの場であった。初年度の参加者は延べ1,600人、翌年からは日本文化を体験してもらう「日本文化教室」も設け、2006年からは数カ国語での対話が可能なボランティアが同行する病院、乳幼児健診、入園、入学手続きなどの「生活支援活動」へと輪を広げ、2018年3月末には年間延べ4,500人、初年度からの受益者累計では延べ4万人を超える活動となっている。「日本語夏期特別教室」「バザー」「国際交流フェスティバル」、さらに2014年から兵庫国際交流会館でも同様のプログラムを開始し、日本語広場を平日12クラス、日本文化教室を週末に3クラス実施している。

一方、ABICでは日本語教育の必要性を想定し、会員が日本語教師として社会貢献する機会創出のための講座を2006年から開始し、講座修了者は200人を超える人数となっている。

今後留学生30万人計画の達成とともに、多くの方々がABICの活動に参加されて、私どもの活動の輪がさらに大きくなることを祈念し、受賞御礼のあいさつとさせていただきます。



2017年度(平成29年度) JASSO関係活動実績(東京・兵庫合計)

「日本語広場」受講者総数	4,177人	週30クラス、講師32人が分担
「日本文化教室」受講者総数	842人	月9教室、講師14人が担当
「生活支援(育児健康相談、入園入学、通院他)」受益者数	164人	病院、学校での通訳、手続き支援
「春・秋のウエルカムバザー」ABIC会員等からの寄贈品	447箱、	売上58万円
「夏期日本語講習」受講者数	41人	講師8人で5日連続講習を2回実施
「国際交流フェスティバル」日本文化体験者数	500人	文化講座講師とボランティア19人が茶道、華道、書道、着付け教室を指導

会員の種類

種類	内容	年会費	
正会員	センターの趣旨に賛同し、活動を推進し、会費を納める個人、法人および団体。(理事会の承認を得て入会)	法人および団体 1口	50,000円
		個人 1口	10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、ならびに個人、法人および団体。	法人および団体 1口	10,000円
		個人 1口	5,000円
活動会員	センターの趣旨に賛同し、事業に参加しようとする個人。	不要	—

(2019年2月末現在)

正会員

法人・団体 (16社、1団体) 〈社名五十音順〉

〈10口〉 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株) (一社)日本貿易会
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人 (13名) 〈敬称略・氏名五十音順〉

〈3口〉 檜田松瑩 勝俣宣夫 中村邦晴
 〈1口〉 池上久雄 市村泰男 岡 素之 小島順彦 小林栄三 齊藤秀久 佐々木幹夫
 寺島実郎 宮原賢次 吉田靖男

賛助会員

法人・団体 (2社、1団体) 〈社名五十音順〉

〈3口〉 (特非)賛否両論 〈1口〉 (有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ

個人 (298名) 〈敬称略・氏名五十音順〉

下記は2018年11月以降にお申し込みいただいた方です。ご協力に深謝申し上げます。
 〈1口〉 坂本英樹 成田 孝

活動会員 2,900名

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、ならびに法人および団体の皆さまのご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp